

分区講壇交換礼拝@高知教会
聖書 マタイ 20章 13～16節
「一デナリオンの約束」

I.

今朝の聖書、主イエスの譬えは、日雇労働者の風景、今日で言うところの「寄せ場」が舞台です。寄せ場では毎朝、労働者を雇用する側と、一日の賃金を得るために就労しようとする労働者で、夜明け前から動き出します。日雇労働者は、そこで求人を待ちます。仕事に就ければそのまま現場へ。あぶれてしまうと、その日の収入はありません。昨日、仕事に就けたからといって、今日も仕事に就けることも限らない。絶えず生活といのちのぎりぎりとのところを強えられる、これが寄せ場の現実です。

学生時代、教会青年の現場研修で、大阪の釜ヶ崎を訪れたことがあります。今日の寄せ場は、不況と高齢化、さらにコロナの影響で一昔前とは様変わりしていると言います。数年前、横浜の寿町の教会を訪問しました。かつて「ドヤ」と言われた簡易宿泊所の多くは、現在はビジネスホテルと見分けがつかない建物になっていました。とはいえ、景気の調整弁として、社会のしわ寄せに真っ先にさらされ、絶えず生活やいのちのぎりぎりのところを強えられる寄せ場の現実は今も変わりません。

主イエスが、このような「寄せ場」を背景に譬えを語っていることは、あらためて驚きです。罪人とレッテル貼りされる人々、非国民扱いされる徴税人たちと食事をしたり、不治の病や障がいのある人々と出会ったり。そして寄せ場を譬えに福音・良い知らせを語ったり…。主イエスのまなざしは、決して損なわれるべきではないいのちに注がれています。

けれども、さらなる驚き、過激なまでの意外性を、この譬えは秘めています。私達の神への甘えや、自分の思い上がりを突き放すような、天国にある過激なまでに意外な風景に聴いてまいりたいと思います。

II.

この聖書も、天国は次のように譬えられると、神の国の風景、神のみ心 100%状態の光景を私達に映し出す譬えです。

ある朝、日雇の労働者が、その朝一番に、仕事にありつくことが出来たという話は話です。現場はぶどう園、日当 1 デナリオン。1 デナリオンは正当な賃金です。労使共に条件を受け、雇用契成立です。この労働者は、この朝の緊張と不安が一気にほぐれて、ほっとしたと思います。生活がかかっています。いのちに関わる問題です。仕事にあぶれる訳にはいけないのです。ですから朝一番に、ぶどう園に連れていかれた労働者は、迎えてくれる現場があることに、良い主人に出会えたことに、どれだけ喜び感謝し、張り切って、仕事に励み始めたのではないのでしょうか。

ところが、仕事をしながら、朝一番の労働者はこのぶどう園の異常に気付くのです。朝

一番から汗水流して働いていると、次々に後から雇われた労働者が、のこのこやってくるのです。午前中に、正午に、そしてあろうことか、3 時頃から働き始める労働者までいるのです。労働者は驚いたと思います。同時に、これだけの人数を雇用するなら、朝から雇ってくれよと、主人にイラっときたのではないのでしょうか。

ところがです。信じ難いことに、このぶどう園は、夕方になってからも労働者を迎えるというのです。朝一番の労働者は、このぶどう園の主人のことが、著しく社会常識に欠いているか。或いはとんでもないお人好しか。理解に苦しんだことと思います。同時に、いくらも賃金がもらえない、そのならず者を横目に、可哀そうだけど、これが日雇労働者の宿命と、朝一番の優越感に浸っていたかもしれません。それだけではなく期待も膨らませたのではないのでしょうか。お人好しの主人のことだから、先の朝一番には賃金を弾んでくれるかもしれません。

さて、遂にその日の仕事あがり。ぶどう園の労働者たちは並んで賃金を受け取ります。後から来た労働者から順番に受け取ります。すると、先に受け取った労働者の賃金が、あの朝一番の1 デナリオンと同額の1 デナリオンなのです。朝一番の労働者は1 日の疲れが飛ぶくらいの怒りが込み上がったのではないのでしょうか。同時、先ほどの期待感をつき上がってきたのではないのでしょうか。ところが、朝一番の労働者が受け取る賃金も約束の1 デナリオン。このぶどう園の労働者は一人一人が、朝一番の約束の1 デナリオンだったのです。

朝一番の労働者は、もう押さえきれずに主人に食ってかかります。「こんな不当なことはあるか。」

けれども、この主人の次の言葉の前に、朝一番の労働者は言葉を返すことが出来ません。

「友よ、わたしはあなたに対して不正をしてはいない。あなたはわたしと1 デナリオンの約束をしたではないか。自分の賃金をもらって行きなさい。わたしはこの最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。」

主人は主人なりの公正さで、ちゃんと賃金を払っているからです。朝一番の労働者には約束の1 デナリオン。ただ、先の者にも後の者にも、ただ等しく1 デナリオンであるだけなのです。さらに、こう続けます。

「自分のものを自分にしたいようにして、いけないか。それとも、わたしの気前の良さをねたむのか。」

このぶどう園の主人が主人であるべくして語る不動の自己主張が、ここにあります。それもそのはずです。天国・神のみ心 100% 状態とは、このぶどう園と主人のようなものと、譬えられているからです。

III.

この譬えを、私達は府に落とすことが出来るのでしょうか。約束の1 デナリオンが、朝一番の約束であるの同時に、夕方の労働者への気前の良さであることに、素直に喜べるでしょうか。私達の善悪の判断の物差しは朝一番の労働者と同じではないでしょうか。そのどこが悪いのですか。

けれども、このぶどう園の主人が断固通す筋は異なるのということです。あまりに受け入れがたく、過激で挑戦的で厳しいです。朝一番の労働者が手にした1デナリオンと、夕方から働き始めた労働者の1デナリオン。同額ですが、双方にとって価値が全く異なっています。けれども、それが天国・神のみ心100%状態の風景なのだというのです。

けれども、この譬えには、もう一つの風景が描かれていることは確かです。最後の労働者への1デナリオンです。どれほどの救いだったのでしょうか。これほど、「底なしの懐の深い」1デナリオンがあるのでしょうか。

約束の1デナリオン、それは、受け入れがたい神の厳しさであるのと同時に、神の底なしの懐の深さでもある。これが、この譬えが秘める、過激なまでの意外性なのだと、今朝受け止めたいと思います。

私は、この譬えの余韻に、こんなこと風景を想い浮かべます。

あの朝一番の労働者は、翌朝も寄せ場へ。けれども仕事にあぶれてしまいます。行く当てもなく気がつくともう夕方。一人肩を落として佇むこの労働者を捜して来てくれる人、語りかける声があります。「誰も雇ってくれなかったのか…」、あのぶどう園の主人なのではないのでしょうか。

これも、天の国、神のみ心100%の風景なのではないのでしょうか。

そして、私達一人一人は、日々、毎朝、あの主人がいるぶどう園、1デナリオンが約束されているぶどう園に招かれる存在として生かされている。この譬えは、そのように私たちに語りかけているのではないのでしょうか。朝一番に、ぶどう園に行ける日もあるでしょう。けれども、夕方にならないと、ぶどう園に行けない日もあるのです。けれども、確かなことは、日々、私達一人一人は、あの1デナリオンが約束されているぶどう園に招かれているということです。

お祈りします。

主なる神さま、時に独善的になったり、劣等感にさいなまれたりする私達です。けれども、私達は、日々、あのぶどう園に招かれている存在とされていることを信じて、悔い改める者です。新しい週の歩みを導いてください。主のみ名によって祈ります。アーメン